白道のカミーノ便り

キューバ③

電気容量足りずストレス

キューバのシンポジウムでは2週間の期間中、少なくとも2点の陶芸作品を仕上げ、最終日に予定されている美術館での展覧会初日に展示しなくてはならない。

現地で何を作るのか、あらかじめイメージを固めておかないと、とんでもない事態になる。前回（2006年）は、キューバの特異な状況に戸惑い、ずっとストレス過多で、ほとんど楽しめなかった。

焼き物作りの合間にくつろぐ工房の午後＝キューバ・カマグエイ、筆者写す

それの第一は、信じられないほど容量の小さい電気事情である。電気窯は四つもあるのに、一つずつしか使えない。中が1㍍四方くらいの最も大きい窯は、電気容量が足りず全く使えない。専ら大きな肉の塊を炭火で焼くオーブンと化していた。

残りの三つの手作りの電気窯はとても小さく、内径が30～40㌢くらいしかない。ちょっと大きな作品になると一つしか入らない。

世界中から陶芸家が集まり、何かに取りつかれたように制作する。窯の周辺は焼成を待つ作品で足の踏み場もないが、窯に入るのはわずかなので、うかうかしていると、最終日に展示するものがないということになる。

様々な歓迎式典がある最初の3日間にも、24時間出入り自由の深夜の工房で、作陶する人影があるのはそういうわけである。

（つづく）

© 朝日新聞社　無断複製転載を禁じます。
すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。